

はるなはだいじょうぶです、ほんとうにだいじょうぶです

f-bacon

「はるなはだいじょうぶです、はるなはだいじょうぶです」

とても優しい声で、提督はおっしゃいました。

なにかこう、からかわれているのかなと思いました、そうではないようでした。

「はるなはだいじょうぶです、はるなはだいじょうぶです」

少し節回しのついた、謡のようでした。

声に合わせて提督が、さらり、さらり、と私の頭を撫でてくれていました。やわらかい手つきは少しくすぐったいものでした。

いつになく、のどかな気持ちになれました。

「あのう」

ですが、状況が掴めないままこうしているのも居心地が悪いのです。

「うん？」

「提督は・・・いえ、榛名はどうしてこのようなことになっているのでしょうか・・・」

こちらから声をかけると、はてな、という具合で提督は私を見下ろして、にっこりと微笑んでくれました。提督のお優しい顔を見ると、榛名は問い質すような真似が気まぜく思えてきました。

「そうだなあ」

また、さらり、と私の頭を撫でて下さるのでした。柔らかな指先でした。見ていると提督の顔は思案げになりながら、ゆるゆるとあらぬ方を見上げらしたので、榛名からはあごの下、喉首のあたりが良く見えました。

そう、榛名は提督に膝枕をして貰っているのです。

あ、剃り残しのおひげが一本あります。

そういうのは榛名はちょっと気になります。

「榛名はだいじょうぶなのかなあと思って」

提督は首をゆうっくりと左右に揺らしながらそうお尋ねでした。

「はい、榛名は大丈夫です」

「うーん」

当然のことでしたので、すぐにお返事をしましたが、それに提督は納得のいかれなご様子になりました。

「うーん・・・そうかあ、そうなんだよなあ。はるなはだいじょうぶです。だいじょうぶ」

そしてまた、うーん、うーん、と唸りながら、やはり手つきはとてもお優しく、榛名の頭を撫でて下さるのでした。

元に戻ってしまいました。

良く分からないままです。

「あのう」

どういたしましょうか。榛名はお仕事があります。

もちろん提督にもお仕事がたくさんあるはずですが。

提督が榛名を大切に下さるようなご様子でいるのは、榛名としても嬉しく、平素の通りであれば感激です、と口をついて出てきてしまいそうですが、いまの状況は艦娘として相応しくないと言えます。

そうです、榛名は新しい砲の試射を頼まれていました。急ぎではないとは言われていますが、このまま

では任務に障りがあるのではないのでしょうか。

「はるなはだいじょうぶです、はるなはだいじょうぶです」

などとつらつら考えている間も提督は詠うようにそう言って私の頭を撫でて下さるのでした。その動きがときおり髪を梳くようになるのが少し気持ち良くて、ずっとこうしていたいなあと思ってしまうのですが、これは良くないと自らを戒める気持ちもあり、この二つの気持ちが互いに争いあうのでした。

しかしやはり榛名は艦娘なのです。

「霧島から頼まれているお仕事が」

気を確かに持って任務の話をしようしました。するとどういう偶然なのか、霧島本人が右手の廊下からこの玄関ホールに入ってきました。

「あっ!？」

思わず声を上げ、とっさに私は跳ね起きました。噂をすれば影とばかりの霧島の姿でした。

ともすれば提督にしなだれかかるような不自然な姿勢のまま、霧島と目が合いました。膝枕をしていただいてる姿は確実に見られたと思います。霧島は指先で眼鏡の位置を直してじっと見えています。霧島眼鏡は窓ガラスを透って少し弱まった南国の日差しをにぶく映していました。

これはとても言い訳ができない状況です。数瞬の間、霧島は眼鏡に指先を当てたまま動きませんでした。眼鏡に当たる光の加減で霧島の表情は解りにくく、ただ口元は固く閉じられていました。

ひどく長く感じる数秒の後、霧島が口を開きます。

「なるほど。さすがです、提督」

ぼそりと霧島がそう言うのを確かに聞きとめました。独り言のような小さな声でした。

「えっ?」

また思わず私は声を上げましたが、霧島は口元に怪しい笑みを浮かべつつ、俯きがちになってこの玄関ホールをつかつかと足早に横切り、左手の廊下へと歩き去って行きました。

「えっ?」

霧島は行ってしまいました。なおも霧島は独り言を呟いていたようでしたがそれは聞き取れませんでした。榛名は難詰されるものとばかり思っていました。なにしろ仕事をほったらかしにしているのです。これは、助かった、のでしょうか。見逃してくれたのでしょうか。霧島らしくない話です。

「はるな」

「あ、はい」

体を起こした私を提督はまた寝かせて、膝枕の体勢に戻してしまわれました。

「だいじょうぶだ榛名。霧島には、榛名をしばらく借りると伝えてあるから」

「ええ?榛名をですか?」

「うん。だからはるなはだいじょうぶなんだ。だいじょうぶ。はるなはだいじょうぶです」

今度こそ、からかわれているのだなと思いました。

この泊地に着任して以来、前任の霧島の指示で榛名はお仕事をしていました。金剛お姉さまが、勝手の解るまで霧島の下で動くようお決めになったからでした。とはいえ私たち艦娘は提督の直接指揮下にあるのが本来です。

ですがいくら提督とはいえこんな風にお仕事をほっぽりださせるようなことをしていいはずがありません。

「提督」

提督にもご休息は必要でしょう。私たちに入渠や補給が必要なように。

こうした息抜きも必要なのかもしれません。

「ああ」

霧島に話してあるということは、今日のいまのこのことは提督の気紛れな思いつきではなく、なにか意図があるということです。それはきっと良からぬ意図なのです。なぜなら霧島は笑っていました。いつになく、というかあの笑みは見たことがあります。可笑しな新兵器のスケッチを描いたり設計したりしているときの笑みです。この間はオートジャイロと水上機のあいの子のような機体の設計をしていました。おそらく提督はあの新兵器の開発について霧島と良からぬ取引をしているのです、きっと。榛名は少し怒っています。霧島の道楽じみた兵器開発は資源の無駄遣いです。そもそも霧島は戦艦なのになぜ航空機の設計図などを描いているのです。砲弾ならともかく。それを提督が黙認する引き換えにきっと榛名はこのような状態になっているのです。きっとそうです。提督がいま榛名に何をお求めなのかは知りませんが、そうした不正な取引はこの泊地に与えられた使命を損なうものです。

なのでそう言います。

「提督のなさっているこの行為は私たちに与えられた使命と関わりが無いのではないのでしょうか？」

「そうだね」

やっぱりそうなのだ。この方は真面目な方だと思っていたのに。

ちょっと悲しくなります。そして残念です。

「いまのこの状況についてご説明ください」

もうやめましょう。

そう思って榛名は起き上がろうとしました。

ですがそれを察した提督は、ぎゅっと榛名の肩を押さえつけ、

「はるなは本当に大丈夫なのかなと思って」

と、おっしゃいました。

「えっ？」

力が抜けました。

「はるなはだいじょうぶかな？はるなはだいじょうぶなのかな？」

さきほどの時と同じ節回しで、しかしわずかに問いかける形に変えて、提督は私の顔を上から覗き込んでいました。

「だいじょうぶ？」

重ねて提督はお尋ねでした。

「えっと、はい、だいじょうぶです」

「ほんとうに？」

「ええ？はい、だいじょうぶです」

「ほんとうに？」

へんです。

こんなに近くで互いの顔を見合わせて触れ合って、でもとても遠くにいるような、おかしい気持ちになりました。

「あの・・・」

「榛名は、だいじょうぶですか？」

なんだか、すごくとおい、です。

涙が出そうになりました。悲しいのではないと思います。

さびしい、です。

わからない、からです、きっと。でも、それでも。

「だいじょうぶ、です」

なんとか、お返事をしました。

榛名は艦娘です。

金剛型戦艦、三番艦の榛名です。

榛名がお返事をしてからちょっとの間、提督はじいっと榛名を見ていました。深く透き通るような目をされています。こんな風に人から見られるのは初めてでした。

そして提督はぐいっと顔を上げて、鼻から息をぷふーと吹き出し、

「そうかあ。そうなのか。えらいなあ」

と、少し驚いた様子で言いました。

「はるなは強い子なんだな。はるなはだいじょうぶか。強い子だ。えらい子だ。いい子だ。うん、いい子だ」

提督はまたぷふーっと鼻から息を吐き。さきほどまでの、優しいけれども薄紙を触るようだった手つきが、力のこめられた手つきになって、ぐい、ぐい、と榛名を撫でていただきました。

肩を押さえるときのものともまた違いました。

あたたかい。

でも率直に言うと、乱暴で少し痛いです。

それが、とても、あたたかい。あたたかいのは、うれしいです。

さびしいのは我慢できました。

「ひぐっ！」

うれしいのは我慢できませんでした。もう止まりませんでした。榛名は泣いてしまいました。喉からしゃくりあげるような声が出ました。

もうダメでした。

「ひっく！ひぐっ！ ああう！ううう！」

「だいじょうぶだよ榛名。だいじょうぶだ」

ぐい、ぐい、と提督は私の頭や、肩や、腕を撫でています。撫でていただいたところが、あたたかくなります。はっきりとします。

「ず、ずみません」

「だいじょうぶだよ榛名。はるなはだいじょうぶです。はるなはだいじょうぶです。はるなはもう大丈夫」

提督のおっしゃりたい事はよくわかりませんでした。ただ、榛名のことを本当に心配してくださっていたんだなということは、ほんとうに解ってしまいました。だから榛名は、もう止められないのでした。

「ありがとうございます」

「無理をしないようにな」

提督のお顔は見られませんでした。榛名は顔を両手で覆って、丸くなってしまっていました。いつの間にか自然と、そのような姿勢になっていました。

「だっだいじょうぶです」

喉奥からしゃくりあげてくるので上手く喋れません。

「困ったことがあったら言いなさい」

「はい」

「だいじょうぶかな？」

「はい、はるなばだいじょうぶです」

これ以上喋ると涙が出てしまいそうです。ろれつも怪しいようです。

涙が出るとどうして洩もでてしまうのでしょうか。ずびび、と洩を啜る音がしてしまって恥ずかしいのでした。

提督のお服を涙で濡らしてしまいました。きっとあとで霧島にからかわれます。

「落ち着くまでこうしていよう」

「はい・・・はい」

三度ほど頷いて、また最後に提督が、さらり、と優しく撫でてくださったので、びりっと体が痙攣するよ
うな感じがしました。

つづく

後編

「てーえーとくー！おかえりっなさいーい！」

提督はいつもニコニコしています。今日はいつもより嬉しそうです。

「やあ金剛。本部から何か指令は」

帽子を提督から預かり、それを掛けて指令書の束を棚から出します。念のため確認。新しいものはありません。

「アリマセンよー。大規模作戦のウワサはスコシ聞きますが」

「ほう？どんな？」

えーと、と私は首をかしげてあごに指をやります。

「横須賀の比叡が、本土の各鎮守府に航空戦力の増強が指示されたと言ってマース」

今度は提督が思案顔に。

「またソロモンかな？」

「きっとそうデスねー」

航空戦力はもはや欠くことの出来ないものですが、なおそれを増強せよというのはつまり。

「敵飛行場が標的、ということは、また、アイアンボトムサウンド、か」

「今度はダイジョーブです！」

私は提督と考えが一致してちょっとウレシイです。

そして、ドンと自分の胸を叩いて、暗い顔になってしまった提督を励まします。あの時のことを提督はまだ後悔しているようです。私たち艦娘は、それでもいいのに。

「ああ、そうだな。今度は大丈夫だろう」

そして、ふっと提督が顔を上げて。

「あ、だいじょうぶ、といえば」

「ハイ？」

「榛名が」

「ああ、はい。イイコですけど、イイコすぎるのでシンパイでーす」

うん、と提督が頷いて。

「金剛がそう言ってたから。でももう、それも大丈夫だ。ちょっと話した」

「OH! てーとくう！」

私は嬉しくなって飛び上がって、つい提督に抱きついてしまいました。

「おっ、おい、金剛、こら、金剛！」

「オウ、ソーリィ、すみません。アハハ」

提督は奥ゆかしい人なのです。ちょっとからかうとすぐ真っ赤になっちゃうのです。

「まったく、金剛、いつも言ってるが」

「いまのはワザトじゃナイです。とっっても嬉しかったのサンキューハグです！」

私は書類束を両手でもって、自然と体を左右に振っていました。みんなで歌うときに、リズムを取るときのように。

「いやそういうことじゃなくてな、ハグ？だっけか、ダメだそれは」

「オーウ・・・てーとくはケチンボーです」

「ケチ！？いや、金剛？そういうもんじゃないんだぞ、大和撫子たるものなあ」

そんなふうにつくさ言いながら提督は執務机に着きました。

私は手を耳で塞ぎながら窓のほうに逃げました。

「んーんー、キコエマセーン、そういうのは大和と長門にマカセマース。あとアシガラー」

「大和はともかく、長門は違うんじゃないか。あと足柄をからかうのはやめてやれ。けっこう気にしてるぞあれ」

「オーウ。からかってなんてイマセン。相談に乗ってアゲテルのですヨー？」

提督は軽く溜息をついたようでした。

「相談相手が悪いな」

「ヒテイはシマセーン。ワタシはレディではあっても、ヤマートナデシコというのはキュークツでイヤで一す」

ふふふーんと、私は提督の座っている椅子の後ろから回り込み、その右肩に両手を乗せて、その手の上にあごを乗せて、提督とスキンシップを楽しみます。

「ちかい、ちかい」

そうすると提督が慌てるのです。ですが追い払ったりはしないのです。

蝶のように舞い、ハチのようにキッス！が、できれば、てえとくのハートはワタシのもので一す。キッスは、一度すごーく怒られたので、なかなかタイミングが難しいねー。

と、ソレはともかく。

「榛名はどうでしたかー？」

そう聞くと、今度は提督は大きな溜息をつきました。

「まったく、秘書としてどうなんだこれは。執務中に」

「はーるーなーのーこーとー！」

提督の言葉をさえぎって、提督の肩を揺さぶりました。

「あーわかった。わかった。あーもう」

こほんと空ぜきをしたあと、ぼそっと「鳳翔にもどそうかな」と提督が呟いたので、私はぎゅっと手に力を込めました。

「いたいいたいごめんごめんわかったはなすわかったいたいごめん金剛ごめんごめん」

「いえす」

ふっふふーん。提督の秘書艦はこの金剛をおいて他にはいないのです！

「オレ上官なのにな・・・まあいい。君たち艦娘に共通していることだが、任務第一で、それはけっこうなんだが、榛名の場合は無理を押し癖が」

そこで提督がぎゅっと口を閉じて。鼻で息を吸ってぷふーと吐きました。てーとくのヘンなクセです。

「癖が、あるようだ」

「ソウデスネー。とてもマジメなコですからねー。イイコです」

「ああ、いい子だ」

うん、と提督が頷いて、首筋がぎゅっと引き締まるのが見えて、あ、おひげが剃り残し。こういうトコロが可愛いです、ていとくう。

「だが無理に出撃して轟沈にでもなったらいかんからな。損傷状況を誤魔化すことはないだろうが、今後の大規模作戦でてんやわんやになるだろうから」

あの時のことを思い出しているのでしょうか。提督は話しくそうにしています。

「お水、飲みますか？」

「ああ、うん」

私は提督の肩にかじりついていたのでから離れて応接セットの方へ行き、薄緑のガラスの水差しをトレーに載せて戻りました。

「しかし君達のおかげで我が海軍も、なんというか奇妙なことだが、非常に心強いこととなっているのは感謝している」

「アーン！他人行儀なのはイヤで一す！」

「ああいや、なんだ、オレに出来る範囲で何か、君達に報いることが出来ないかと思うと、つい、な」

エメラルドグリーンに色付けされたガラスの、これはサツマキリコと言うそうですが、これでお水を注ぐのが私は好きです。綺麗で、儂い。私たちとはまた違った道具たち。

提督のおじいさまがこの素晴らしいガラス細工のお商売をしていたとか。それも上手く行かず、おじいさまが亡くなられてからは東京に出ていた親戚のお家に身を寄せることになったとか。提督はとにかく早く独り立ちをしたくて海軍兵学校に入ったとか。今はもう、この綺麗な器は提督の故郷では作られていないそうです。いつか退役したら、それをよみがえらせる仕事をしたい、そう提督は言ってました。

いろいろなお話をしてもらいました。

私たちが私たちのことを話せない代わりに。

「他の鎮守府、泊地ではそれぞれの提督がそれぞれのお考えでオペレートしてます。私たちの提督は、提督のお考えで、トリートしてください」

「ああ、うん。いや、不思議でな。ずっと不思議で」

水差しの口に被せられたコップを手に取り、お水を注いで渡すと、提督はそれを一息に飲みました。

「兵というものは言う事を聞かんのだ。それを統率するから将である。オレも生まれは薩摩兵児だ。陸軍なら訓練を通して背中でも語ることもしてみせるが海軍ではその機会も限られる。ましてや君たち相手だ。統帥の腕前を見せねば誰もついてこん」

空になったコップを提督から受け取り、またお水を注いで、提督を見る。ぼんやりとした顔つきで、考えながら喋っているのが良く分かります。ふわふわと差し出されていた手にコップをあてがうと、提督は私を見上げてコップを受け取りました。私は自然と微笑んでいました。

「と、思っていた。君達のことを見ていなかった。すまなかったと思う」

「ノープロブレムで一す」

アイアンボトムサウンドでは何隻もの駆逐艦たちが沈んで、それでまた提督は焦ってしまって、成果を上げなければと、ずっとそう言っていましたね。何かに追われるようで、すこし可哀相でした。

あのときのことを思い出しているのでしょうか。提督はコップを机に置いて、左手を何度か開いたり、閉じたりして、そのてのひらを机の上に置きました。

「上層部から見れば君達は理想の兵だ。なにしろ命令違反がありえない。そこまで豊かな感情を持ち、こうやって話もできるのに。それに気づいたときに」

私は水差しを置き、俯いてしまった提督の手に手を重ねて置きました。提督の手は少し冷たくなっていました。

「もう一人も沈ませまいと。君達が何者であるかは軍の機密だ。オレなんぞのような前線の佐官にそれを知る術はない。確かに君達は人間ではない。だがただの兵器として扱うことが、オレにはできない」

重ねた手にもう片方の手を添えて、私は提督の手を両手でぎゅっとしました。おててを暖めてあげましょう。

「ていとくは本当にお優しいですネー」

提督はふふっと笑って私の手を握り返してくれました。

「どちらかにしてくれと鳳翔に怒られたからな。あのときのピンタは効いた。それで決めた」

そして提督は私の手を取ったまま、自分のほほに当てました。

OH! 予想外のスキンシップです！今度は私がウフフと笑う番でした。私がウフフと笑って、自然と目があって、見つめあって、どちらとはなしに手を離しました。

「私はパートシェアリングだと思いますケドネー。鳳翔は、空母の中では建造時期も早いですし、いろんなエクスペリエンスがあるんでしょうネー」

いろいろな提督がいて、いろいろな考えがあって、でも私たちは艦娘ですから。

「比叡のところはおじーちゃん提督で、肩を揉んでくれとか腰を揉んでくれてというのが加減が解らなくて悩んでるソーデス」

「はははは！」

ひどい提督もいるそうですけどねー。私たちは、この泊地の艦娘は幸運な方なんでしょうねー。

「本土の提督は年配の方が多そうだからな。経験豊富な方たちが守りを固めていると言ったところか」

そしててーとくがちらりと私を見上げました。

ナンデショウ？

「そういえば君達は歳をとらないのか？金剛型はずいぶん」

ふーふーふーん。

私はてーとくのおごに手を伸ばして。

「あ？うん？なんだ？」

「ヘイヤッ！」

チョロリと伸びた一本ヒゲを引き抜くのです！

「いって！なんだ金剛！」

「オヒゲが伸びてましたノデー。レディとしてはジェントルマンの身だしなみに気をつかいましたー」

そしてオヒゲさんはゴミ箱にポイなのです。オヒゲさんを掴んで部屋のスミのところまで歩いて行って、ポイっと。

「あ？あー、うん、ありがとう金剛」

「ドウイタシマシテー」

艦娘は、娘なのですよ。乙女心があるのです。

歳のことなんか、聞かれないんですうー。

「提督、いらっしゃいますでしょうか？」

カチャリとドアをあけて、榛名が顔を覗かせました。

「いるぞー。入ってよーし。ていうかノックしろー」

「あ、ハイ。もうしわけありません」

榛名はするりとスキマを通るように部屋に入り、後ろ手にドアを閉めて、もじもじしています。

「ああいや、構わんのだが、そういうものだからな。作法だ作法」

「あ、はい。まだ洋式は慣れなくて」

「ああ、横須賀は古い建物も多いからなあ。それに榛名は予備役も長かったと聞いているよ。ゆっくり慣れなさい」

提督は榛名に優しく声をかけますが、榛名はまだ決まり悪げです。

「ダイジョーブ。ほとんどのコはすぐに覚えられまーす。榛名ならダイジョーブでーす」

榛名はすぐシュンとするのが、もー、カワイイ！ズルイ！イジメタイ！じゃない！

「それでー、なんのゴヨー？」

よく見ると榛名は書類を持っていました。あ、電文かなー。

「あ、はい」

気を取り直した榛名はピチッと気をつけの姿勢に。

「軍令部から打電です。詳細は追って知らせると」

キリッと任務モードになった榛名は、カツカツと執務机の手前まで来てシュピッと敬礼し、私に書類を差し出します。

「ゴクロー」

答礼し、受け取って、軽く目を通して、提督に渡しました。暗号電文ですねー。

「次の作戦指示でしょうか？」

「本部は作戦目標を指示するだけでそんな細かいところまで口出しはしないよ。それから大規模作戦の時にどこそこ泊地と連携しろとか、重点制圧海域を指定してくるだけだ。資材や艦船、兵や部隊をあっちにやれこっちによこせとやかましいがなー」

打電を見て提督は引き出しから封書を二つ取り出し、一つを私に渡して、もう一つの封を切ります。

「そのおかげで榛名もこの泊地に着任できたわけだ。それはそのまま焼却破棄」

そう言って提督は榛名にほほ笑みかけ、そして私に封書を渡して指示しました。

「了解デース」

五枚の指示書が入っていました。提督はそれの一枚目を熟読し、二枚目から五枚目は軽く目を通す程度で、ひとこと呟きました。

「航空戦力の充実をなおいっそう図られたし、だったか？金剛」

「ウワサどおりでしたか？」

うーんと唸って書類を置き、提督は腕組します。

「まあ、敵さんがそうらしい、ということでこちらもそうせざるを得ない、というのが事実だな。対空兵装の開発と航空戦力の充実は、ある種いたちごっこだからなあ」

「そうなのですか？」

榛名が聞いてきました。

「ああ、榛名は大規模作戦は初めてなものな。今後の一連の作戦では、金剛型の三人は二人ずつ交代で出撃するような形に思うから」

そう提督は答えつつ、さきほどの五枚の指示書のうち一枚に署名して榛名に手渡しました。

「霧島に渡してくれ。軽巡と駆逐の選任は任せると伝えてくれ」

「はいっ！」

榛名は受け取って脇に挟みこんで敬礼。提督が答礼。

そして提督は敬礼の手を下ろしません。

なので、榛名も直立敬礼のまま動けません。

「ホワッツ？」

提督がじっと榛名を見つめていました。榛名もとまどう様子もなく見つめ返していました。

「無理をするなよ」

提督を見ると、真剣なまなざしです。

「はい！」

榛名を見れば、同じく真剣な顔つきですが、何か嬉しそうに見えます。

「よし」

提督が手をおろして、榛名も手を下ろしました。

ふーむ、二人の間でどんな話があったんでしょうかねー。榛名は大人しいように見えてやっぱり私の妹

艦ですからねー。油断は禁物かもしれません。

私がそんな事を考えていると、榛名はくるっと半回転してまっすぐにドアに向かい、直前で止まって、少し首を傾げて止まりました。

ほわっつ？

提督と二人でその様子を見ていると、榛名はおもむろに片手を上げ、軽く握り、その手をちょっと見ながら、

コンコンとノック。

「ちがうちがう！」

「そうじゃないデース！」

私と提督は同時に大きな声を出してしまいました。提督なんて立ち上がって手を振っちゃってました。

え？と榛名が振り向きま。

「ノックは入室のときにするんだ。部屋の中を誰何するためにする。通る合図じゃない」

「あ、あー・・・あー！」

すごく驚いたような納得した声を榛名が上げました。

ほんとうに解ってなかったんデスね。

そうですね、仕方ないです。そんなことをわざわざ教えてくれるのは私たちの提督だけですから。

「榛名、失敗しちゃいました」

えへ、と可愛く榛名が笑いました。あー！ズルイデース！そんな顔でてーとくをゆーわくしてはダメでーす！！

「ああそうだな」

提督はそんな榛名を見て、すごく穏やかな微笑みを浮かべていました。いつも私たちを見るときの優しいお顔です。

「だがそれでいいんだ、榛名」

榛名はそんな提督を見て、あれっ、という感じの表情になりました。アテが外れたような雰囲気です。

そして、ぱっと目を丸くして。ああ、と声を出していました。

「解りました！提督！」

「ホワッツ？」

何かバランスのとれてないやり取りに見えます。

でも提督はうんうんと頷いています。

「ありがとうございます提督！榛名は、榛名は大丈夫です！」

すごくすごく嬉しそうな榛名の笑顔は、私たちにとってはヘンなたとえですが、まるで初恋が実った女の子みたいでした。

おわり